

## 親

友の結婚式に参加するために、アルゼンチンまで出てきた。

去年の五月、この友人は日本での私の結婚式に出席するために、博士号の授与式まで返上してニューヨークから飛んで来てくれた。今度は、その彼が、ブエノスアイレスで式を挙げることになったのだ。東京からワシントン経由でニューヨークまで飛び、そこからふたたび大型飛行機に乗り換えてブエノスアイレスまで飛ぶと、総計で二十四時間くらい機内の狭い座席に押し込まれていることになる。それでも、私はもちろん行くことにした。

アルゼンチンまでは、意識的にも距離的にもかなり長い道のりであった。東京とブエノスアイレスというとそれぞれ国の首都であり、世界的に有名な大都市であり、東京には築地がありブエノスアイレ

スではタンゴが踊られる、などの漠然とした知識は持ち合わせている。ニューヨーク、東京、パリ、ブエノスアイレスなどと羅列できるので、何だか同じ地平にあるように感じていた。しかし、二十四時間も飛行機に乗っていると、その感覚が麻痺してくる。へとへとになった心身をもって、否が応でも東京とブエノスアイレスを隔てる距離を実感してしまう。

薄暗い機内を出て、明るい陽射しの中に降り立った瞬間、私が入り込んで八王子からこんなにも遠い土地のことを、当たり前のように、知らないことを思った。周りの人々は皆スペイン語で喋っている。客待ちのタクシー運転手の一人は、体操でもしているようだった。ここのタクシー運転手は時々体操をして、健康を維持するのだろうか。未知の目で勝手に想像することはばかりだ。

結婚式は着いた次の日に取り行なわれた。ユダヤ教式の結婚式で、新郎が布袋に入ったグラスを足で思い切り踏んづけて割る儀式が一番のクライマックスであった。その儀式の歴史など知らない私にも、この瞬間はぐっときた。

ブエノスアイレスから戻ってきた目には、途中のニューヨークも東京も未知の場所に映った。尺度が少しずれると、出身地にも、現在住んでいる場所にもまだまだ未知の部分がある、ということに改めて気づかされる。何だか、とても楽しい気持ちになる。☺

## アルゼンチンの目

マイケル エメリック  
Michael Emmerich

翻訳家・日本文学研究者